

妖精

ヒグラシが鳴き始めた……。
やや日差しが落ちたが……まだ、太陽は、頭上高くにある。
手に持った錫杖の鳴る音がセミの声に混じる。

稲葉根王子から滝尻王子まで中辺路は、岩田川に沿って川筋を歩く。
間に、何度も、川の中を徒歩で渡らねばならない。

安珍は、背中に重い箱笈を背負っている。こうして歩くのは至難の技だ。

「六根清浄、六根清浄……」

安珍は、水の中を慎重に足を運びながら歌うように朗々とした声で唱えた。

岩田川は、三途の川と例えられている。

修験者は、こうして、川を渡る事によって、身体を浄化し熊野の地に入って行くのだ。

しかし、今は、水が冷たくて気持ちがいい。

もうすぐ、真砂の郷につく……そう思うと、長い疲れが吹き飛ばような気がする。

木漏れ日が、安珍の日に焼けた肌を斑紋に染めている。

水が澄んで碧い。

一瞬、行く先の水の中に、白い影のようなものを見た気がした。

安珍は、眼を凝らす。

「女だ……」

しかも、身体には、一糸も、身にまもってははいない。

一瞬、ぞっとした……。

物の怪か……あるいは、暑さと疲れが生んだ幻だろうか……。

女の身体は水鳥のように、水中を滑っていく。

ぼっこりと、女が水中から顔を出した。

安珍と眼が合う。

均整のとれた顔に、やや切れ長の瞳がこちらを見つめている……。

安珍は、あわてて眼をそらした。

とたんに、また、女が水の中に潜った。

そして、こちらに向かって一日散に泳いで来る……。

